

古典語「物の聞え」「事の聞え」などについて

東 辻 保 和

はじめに

中古の仮名書き和文には、格助詞「の」を挿んで出来た「物の聞え」「事の聞え」という連語が数多く見出される。それを列記すれば左の通りである。^(注)

物の――

①案内、あなた、あはれ、あやまち、あやめ、有様、色、色あひ、色々、うしろ、枝、奥、おほひ、面白さ、親、折、折ごと、折々、折節、折節ごと、節、香、隠れ、かず、帷子、聞え、興、清ら、くさ、くさはひ、隈、け、気色、けはい、心、心苦しさ、心ばへ、声、さとし、さま、妨げ、師、したかた、上手、調べ、調べども、筋、底、そば、違ひ目、たとひ、ためし、たより、ついで、伝へ伝へ、罪、滞り、名、中、なざけ、ね、ねがら、はえ、はえ、ばえしさ、はざま、はじめ、端、恥かしさ、ひま、姫君、蓋、隔て、へんぐゑ、程、まぎれ、みやび、報い、むすめ、故、用、絵様、

②おぼえ、おもひいで、限り、かた、かため、具、苦しさ、たたり、つひえ、はぢ、まかなひ、様(やう)、ゆかり、例、わづらひ、
③で、下部、上(かみ)、めでたさ、いらへ、いとほしさ、たすけ、

はじめ、よすが、かたがた、ひまひま、因果、葉、うらめしさ、頭(かしら)、悲しさ、木、たぐひ、つみ(積)、なげかしさ、ゆくへ、をかしさ

事の――

④あやまり、有様、いみ(忌)、恨めしさ、折、聞え、気色、心、様(さま)、騒ぎ、繁さ、筋、譬ひ、たがひめ、ついで、閉ぢめ、なざけ、始め、深さ浅さ、まぎれ、乱れ、由、煩ひ

⑤中、作法、掟、便(たより)、咎、報い、趣
この中には、「の」の後項を等しくする、例えば「物の心」「事の心」、「物の聞え」「事の聞え」、「物のついで」「事のついで」、「物のさま」「事のさま」、「物のまぎれ」「事のまぎれ」、「物の折」「事の折」などが認められるのである。これら「物」と「事」とで対立する連語には、どのような用法上の違いがあるものか、一々の場合について検討する必要がある。小稿では、「物の聞え」と「事の聞え」、及び「物の心」と「事の心」とについて、その用法を明かにしようとするものである。

(注) 調査した文献は次のとおりである。

源氏物語(「対校源氏物語新釈」による)、竹取物語(古活字十

行本複製 山田忠雄氏編の総索引所収)、宇津保物語(古典文庫本)、伊勢物語(「伊勢物語の研究」所収の校本による)、枕冊子(日本古典全書本)、蜻蛉日記(伊牟田経久氏の校本による)、紫式部日記(池田亀鑑博士の校本による)、更級日記(御物本油印本)、讃岐典侍日記(日本古典全書本)、落窪物語・栄花物語・大鏡・浜松中納言物語・夜の寝覚・狹衣物語・堤中納言物語・和泉式部日記(以上日本古典文学大系本)

作品毎の使用分布は紙幅の都合で掲げられないので、一往の目安とするため、①・④には、源氏物語に用いられているもの(この中には、他作品に用いられているものも含まれている)。②には、宇津保物語に用いられているもの(この中には、源氏物語以外の作品に用いられているものも含まれている)。③・⑤には、源氏物語・宇津保物語以外の作品に用いられているものを集めた。

「物の聞え」と「事の聞え」と

(一) 使用分布と例外

管見の限りでは、「物の聞え」は、源氏物語の十三例以外には、宇津保物語・落窪物語に各一例ずつ、夜の寝覚に三例をかぞえるのみであり、又、「事の聞え」は、源氏物語の七例以外には、宇津保物語一例、栄花物語・浜松中納言物語各二例ずつをかぞえるのみである。

さて、源氏物語に次の例がある。

(1)御門の御女をも取りあやまちて、事の聞えあらむに、かばかり覚えむことゆえには、身のいたづらにならむ事も苦しく覚ゆまじ。

(若菜下71 対校源氏物語新釈のページ。以下同じ。)

(2)斯かる人の為になむ行ひさわぎ給ふと、物の聞えあらむ、いと聞きにくかるべし。(手習274)

(1)では、「御門の御女をも取りあやまち」たる柏木の心得違ひについての世評が「事の聞え」であり、(2)では、「斯かる人(浮舟)の為になむ行ひさわぎ給ふ」という風評が、「物の聞え」である。以上の二例では、一見、両者に何らかの相違を見出すことが困難なように思われる。

(二) 熟合の度合い

「事の聞え」には、次の例がある。

(3)人の御廻げなくこそ物し給ふべかめれ。斯かる事の聞えあらば、いと苦しかるべき。(檣柱186)

(4)去年の秋の頃、かの右大臣殿より、いと怖ろしきことの聞えまうて来しに(夕顔157)

(5)なほつつむべき事の聞えにより、我には気色を知らする人のなきなめりと思ふ。(匂宮355)

(6)今更に又さる事の聞えありて、わが身はさるものにて、春宮の御ために、必ずよからぬ事出で来なむとおぼすに、いと怖ろしければ(賢木205)

(7)右おほ殿・右大将、このことのきこえのいできたるにこそあれ。さはおもひしことぞや、など心の中におもほす。(宇津保物語・園談下1534)

以上の諸例では、「事の聞え」は複合語と言うよりも、寧ろ、「斯かる事」の「聞え」、「いと怖ろしき事」の「聞え」、「つつむべき事」の「聞え」、「さる事」の「聞え」、「このこと」の「きこ

え」の如くにその構成を考えるべきではないかと思われる。(世)
尤も、次のような例もあるから、「事の聞え」なる複合語が無かったとは言いつてもいい面もある。

(8)世の中間とあはれにあぢきなく、物の折ごと恋しく覚え給へば、事の聞えありて罪に当るともいかがはせむ、とおぼしなりて俄にまうで給ふ。(須磨49)

(9)いかにすべきことにはあらむ。事の聞えあらば、我身こそはいよゝゝ不用の物になりはて、都を見てやみなめ(栄花物語・巻五174)

(10)げにいささかも事のきこえ出で来なば、我がため人のため、いみじう便なかるべきことぞかし(浜松中納言物語・巻1206)

「事の聞え」のこのような用法に対して、「物の聞え」の方では、連体修飾語を被った例を全く見かけない。この現象は、両者の熟合の度合い並びに概念の違いに原因するものと考えてよいであろう。

(注) 例文(4)について、松尾聰博士は「『事の聞え』が一語。「怨るしき」は「聞え」にかかる」とされている。(『全釈源氏物語』巻一・三六六ページ)

(二) 用いられている場面

ここで、「物の聞え」「事の聞え」の用いられている場面を検討してみることとする。

「物の聞え」に次の例がある。

(11)物の聞え隠れなき世のなかに、大将殿わたりに、骸もなく亡せ給ひにけりと聞かせ給はば、必ず思ほし疑ふこともあらむを(蜻蛉173)

この例について、次の二点を指摘し得る。

[A] ここにいう「物の聞え隠れなき世」とは、いわば普遍的事実についての提言であって、抽象的である。故に、こゝでの「聞え」の内容たる「骸もなく亡せ給ひけり」とは次元を異にしている。

[B] 「物の聞え」が現在、世に行われている、もしくは過去に行われたというのではない。

右の[B]の用法は、「物の聞え」の全例に亘って認められるところであり、明らかに此に反すると認められるものは見あたらない。左に用例を摘記する。但、既掲のものを除く。

(12)物の聞えもあらば、いかならむとおぼししながら(賢木339)

(13)……物の聞えあらば……必ず出で来なむ(蜻蛉208)

(14)ことづくる事なくて時方まかりたらむを、物の聞え侍らば、思しあはする事などや侍らむ(蜻蛉165)

(15)……物の聞えあるにや、と苦しう(夢浮橋224)

(16)誰も、物の聞えあらば、いかに思さむと(浮舟102)

(17)身の病重きにより、おほやけにも仕うまつらず、位をも返し奉りて侍るに、『私さまには腰のべて』など、物の聞えひがくしかるべきを、今の世の中憚るべき身にも侍らねど、いちはやき世のいと怖ろしう侍るなり。(須磨4)

(18)……物の聞えあらば、北のかたいかにのたまはん(落窪物語・巻162)

(19)聲きかばおぼえ給なむ。しりだにそめ給なば、男の御心は、いまはいかゞはせむと、よにおぼさじ。もの聞え、いますこしわづらはしく、聞きぐるしかるべし(夜の寝覚め)

これ以外の例は、その所在のみを左に列記する。

源氏物語（須磨31、関屋179、行幸143、浮舟80）、宇津保物語（因讀上136）、夜の寢覚（124・136）

右に述べた「物の聞え」の用法に対して、「事の聞え」では、明かに普遍的事実の提言（即ちA）と見られる用例は認められない。但、次の例に一往注意を要する。

②0事の聞えおのづから隠れなければ、おほ殿などにも聞き給ひて、さやはあるべきなど、女がたの心浅きやうにおぼしなすぞわりなきや。（夕霧266）

この例は、一見、(B)の「物の聞え」と同じく、普遍的事実の提言と見られるかもしれない。源氏物語大成によれば、この箇所が、別本の因冬本では「ものきこえ」となっていることも考え合せられもするのである。しかし、この「事の聞え」は、(B)の「物の聞え」と異り、その内容たる夕霧と女二宮との関係についての風聞と次元を等しくしており、且、その「事の聞え」が既に世に行われて、その結果、「殿（雲井雁の父）」が、「女がた（女二宮）の心浅きやうにおぼしなす」ことになったのである。

次に、「事の聞え」の用例のうち、既掲の(8)(9)(10)について見ると、いずれも、仮定法が用いられている。又、

②さて宮の内は事の聞え有べければ、この西の京に西院と云所に、いみじう忍て夜中におはしたれば（榮花物語・巻五175）

②2事の聞えかくれなくは、中納言の思はん事こそ、いとほしうはづかしかりぬべけれど、いかゞはせん（浜松中納言物語・巻四388）

これらも、それに準じ得るであろう。この点、上述の「物の聞え」の用法（即ちB）と等しいと言える。しかし一方、「事の聞え」では、前掲(4)(7)(10)などの如く、「事の聞え」が現在行われている、もしく

は過去において行われたことを示す例も見られるのであって、この点で、「物の聞え」と用法を異にすると思われられるのである。

四 王朝人の心理

「物の聞え」「事の聞え」に対して、王朝の人間は、どのような心理的反応を示したのであるうか。

第一に、「物の聞え」「事の聞え」共に、当事者にとって、好ましい「聞え」の意味には決して用いられていない点に注目せられる。特に、「事の聞え」では、「事」が、秘すべき男女関係の問題をその内容としている例が多い。また、一度その「聞え」が世に行われたならば、自己に精神的苦痛を齎すものであるという観念の存したことが、その表現から容易に帰納されるのである。例えば、既掲の例文(2)の「聞きにくかるべし」、(5)の「苦しう」、(9)の「わづらはしく、聞きぐるしかるべし」、(3)の「いと苦しかるべき」、(6)の「いと怖ろしければ」、(9)の「不用の物になりはて、都を見でやみなめ」、(10)の「いみじう便なかるべきことぞかし」などの諸例、及び次の例などから明かに看取し得るところであり、これら以外の例についても、右に反する例は認められない。

②尋ね得給へらむ初めを思ふに、さだめて心清う見放ち給はじ。やんごとなき方を憚りて、うけばりてそのきはにもてなさず、さすがに煩はしう物の聞えを思ひて、かく明かし給ふなめり、とおぼすは口惜しけれど（行幸143）

以上に述べた事象についての、これ以上の解釈は、ここでは控えることとしたい。第二に注目せられるのは、「物の聞え」への反応に、「事の聞え」には見られない或種の畏怖の情の伴う例が、源氏

物語を主として六例あることである。

四年頃は只物の聞えなどのつつましさにすこしなさけある気色見せば、それにつけて人の咎めいづる事もこそとのみ、ひとへにおぼし忍びつつ、あはれをも多う御覽じ過ぐし、すく／＼しうもてなし給ひしを(須磨³⁸)

因かろ／＼しきもどき負ひぬべきが、物の聞えのつつましきなり。

(浮舟³⁹)

因事の聞えありて罪に当るともいかがはせむ、とおぼしなりて、俄にまうで給ふ。(中略)さいひながらも、物の聞えをつつみて、急ぎ帰り給ふ。(須磨⁵¹)

因覚えぬ世のさわぎありし頃、物の聞えに懼りて、常陸にくだりしをぞすこし御心おきて年頃はおぼしけれど(関屋¹²⁶)

因入道の宮よりも、物の聞えや又いかが取りなされむと、わが御ためつつましけれど、忍びつつ御とぶらひ常にあり。(須磨²)

因あながちにしのび隠るへ尋ねおはしたらん心ふかさを、うち聞きつけたる心どもは、あはれにかなしきに、ものきこえ・世のつゝましさもわすれて、南面の、世づきたるかたに入れ奉りて、対の君対面して(夜の寢覚²²⁴)

右の諸例に見る如く、「物の聞え」に対して、当時、「慎しみ」「懼り」の情が持たれていたことが認められる。ある種の畏怖とはこれである。他方、「事の聞え」には、全用例中で、

なほつつむべき事の聞えにより我には気色を知らする人のなきなめりと思ふ。(匂宮³⁵⁵)

この例をかぞえるのみであり、且、これは、既に述べたように、「つつむべき事」(女三宮の生家)の「聞え」と考えるのが妥当かと思

われる例であるから、「物の聞え」の対等例とすることに躊躇せらるる。

さて、以上の如き、「物の聞え」に対する畏怖の情は、必然的に、人間の行為に事前に制肘を加える力となって働いていたようである。即ち、例えば、因では、「物の聞え」への畏怖ゆえに、藤壺が源氏に「すく／＼しうもてなし給ひし」のであり、因では、頭中将が、決心して須磨の源氏を訪問したものの、やはり「物の聞え」への畏怖ゆえに、「急ぎ帰り給ふ」のであった。かかる例は、源氏物語に限らず、他にも認められるところである。少し長いが引用する。

因おとど「なしつばは、さてもしらず。ただいま、よは右大将おやこのみよになりなんとすめり。(略)うちは右大将にかなひ給へば、かのぬしたち、もちて、これをと申さば、なにのうたがひかあらん。われもくちあくべくもあらず。(略)宰相中将「いとふびんなる事ものゝきこえ侍れ。天下のみこむまれ給へりとも、さる心あるべきひとか。(略)」(宇津保物語・国譲上¹³⁶)

この例文では、「もの聞え」もあることゆえに、仮に春宮に立つべき皇子が生れても、右大将には、それを願ひ出るような野心はあるまい、というのである。ここでも、やはり「もの聞え」は、声も姿も無い制肘力として、心奥に働くものであることが知られよう。しかも、「物の聞え」は

例「その侍らん人は、さていかでかもてかくし給ふかた侍らじを、迎へてんと思を、そちこそ参らんと思へ」とのたまへば、「げにまぎらはしくき御ありさまにこそ侍れど、さても物の聞えはをのづから侍らん」ときこゆれば(夜の寢覚³⁵⁶)

に語られるように、当事者の意志とは無関係に、自然に世に行われ

るものであり、且、既に述べた如く、とかく、当事者にとって好ましくない事態が「物の聞え」によって、世に立つものである処に、畏怖の情を抱かせる根本原因が潜んでいるのではないかと考えられるのである。しかも、これが人間の行為に制肘力となって働くというところから、「物の聞え」についての思念は、王朝のモラルを内から支える一つの力であり得たのではないかと、想像されるのである。

他方、「事の聞え」には、かかる用例は全く見当らないようである。

(四) 連語と複合語と

以上の考察を通じて、「事の聞え」は、三要素間の熟合度が弱く、連体修飾語の有無を問わず、具体的な事柄についての聞え々という概念に異同が認められず、「事」「の」「聞え」の三単語と見るのが妥当であり、「の」は、連体格助詞と見るのが適当と考えられる。一方、「物の聞え」は、その構成要素間の熟合度が強く、例(2)の如き、一見「事の聞え」と区別したいものも稀にはあるが、独自の概念と観念を有すること、既に論じたとおりである。これは、「物の聞え」を複合語と見ることの妥当性を示すものであろう。

「物の心」と「事の心」と

(一) 使用分布の隔りと偏り

管見の限りでは、「物の心」は、源氏物語三十一例、宇津保物語十例、落窪物語二例、栄花物語八例、狭衣物語六例、大鏡・浜松中納言物語・夜の寝覚・紫式部日記・更級日記各一例をかぞえる。他

方、「事の心」は、源氏物語十三例、宇津保物語・伊勢物語各一例を認めるが、後述する如く、この中の確例と見るべきものは、源氏物語の十三例のみである。このように、先ず、「物の心」「事の心」両者の使用分布には、隔りと偏りのある事を指摘しておかねばならない。

(二) 熟合の度合い

次に、両者に上接する連体修飾語についてみると、「物の心」には、接した確例が全く見られないことに注目される。但、宇津保物語に次の例がある。

(1) 一宮は、いぬ宮とひゝなあそびし給。御かたちひゞにひかりまさるやうにおはす。いみじきはらだち、おそろしきものゝ心にも、見たてまつらんとよろづの事わすれてえまれぬべし。(楼上上174)

この箇所については、日本古典文学大系本の校異によれば、「ものゝ心はへ」「ものゝ心へ」「ものゝ心え」等の異文があり、文意からしても、「おそろしき者の・心」の意であろう。

これに対して、「事の心」には、次の諸例がある。

(2) かくてのちは、中将の君にも、忍びて斯かる事の心を宣ひ知らせつけり。(行幸114)

(3) うへの、夢のなかにも斯かる事の心を知らせ給はぬを、さすがに心苦しう見奉らせ給ひて(薄雲247)

(4) この事の心知れる人、女房のなかにもあらむかし。(柏木15)

(2)は、玉鬘の事情を、(3)は、冷泉院が源氏の御子であるという秘密の事情を、(4)は、女三宮と柏木との事情を、夫々指示語で明示したものである。この三例について言えば、「事の心」なる複合語

を認め得るか、かなり疑わしい。「斯かる事」「この事」の「心」という構成とも考えられるからである。尤、「事の心」なる複合語が全く存しなかったとは、必ずしも言えない面がある。次の例があるからである。

(5) 昼はいと人繁く、なほ一度もゆしあんずるいとまも心あわただしければ、夜々なむ、静かに事の心もしめ奉るべき(若菜下26)

これは、源氏が女三宮に、琴の奏法を教えようとすることばである。かかる例があるにしても、「物の心」と比較する時、熟合の度合いに差のあることは否めないであろう。あたかも、前述の「物の聞え」と「事の聞え」との關係に類似した關係を、この両者に認めることが出来るようである。

(注) 連体修飾語を被らない「事の心」の例は、他に、明石22、絵合196、胡蝶23・42、昔60、行幸133、鈴虫196、浮舟138、夢浮橋316・324がある。

(三) 用いられている場面

文中に於て、「物の心」「事の心」を対象(連用修飾語)とする受け詞(被修飾語)を分類すると、次の如くである。

○「物の心」

知る 源氏16、宇津保5、榮花8、狭衣6、落窪2、大

鏡1、浜松中納言1、更級1

知召す 源氏1

知りそむ 源氏1

思ひ知る 源氏1、宇津保1、夜の寢覚1

思ほし知る 源氏1

おぼし知る 宇津保1

得 源氏8、紫式部日記1

問ひあらはす 源氏1

聞き分く 源氏1

おぼしたどる 源氏1

見る 宇津保1

○「事の心」

知る 源氏6

承る 源氏1

推し量り思ふ 源氏1

申す 源氏1

しむ 源氏1

宣ひ知らす 源氏1

尋ねかへす 源氏1

たがふ 源氏1

取る 源氏1

書く 源氏1

「事の心」には、はじめに触れた如く、源氏物語以外に、次の二例がある。

(6) 月のいとあきらかに、空すみわたりてしづかなるに、山の木かげ、水のなみ、やうやう風すゞしくうちふきたてたるに、いとおとなおとなしうひきあはせ給へるを、大将、かんのおとども、おりも心ばそくなりゆくに、涙おちて、事の心をしへたてまつり給(宇津保・楼上下180)

この箇所は、日本古典文学大系本の校異(三の四五九べ)を見る

と、「琴をしへさし給て」「心おし」「心さし」等の異文がある。「事」は、あるいは「琴」かとも思われる。

(7)おほやけのみやつかへしければつねにもえまうてすされとも事のことろをうしなはてまうてたるになんありける(伊勢物語・八十
五段)

この箇所を、「事のことろ」とするのは、神宮文庫本のみであり、塗籠本では、「心さしはかりはかはらさりければ」、他の諸本では、^(註)いづれも「もとの心」とある。

かかる状態であるから、この二例を「事の心」の確例とするのに躊躇せられる。

さて、受け詞の中、「知る」は最も例が多く、且、両者に共通して用いられていることがわかる。しかし、「物の心ヲ知る」と「事の心ヲ知る」との用法を比較してみると、両者は、その内容を異にするものであることが認められる。端的に言えば、「物の心ヲ知る」は、「事の心ヲ知る」に比べて、より抽象的、根源的であると言えるのに対して、「事の心ヲ知る」の方は、より具象的、当座的であると言えそうである。以下例を掲げる。但、既掲のものを除く。

(8) (女トイフモノハ) 大方物の心を知らず、いふかひなきものにならひたらむも(夕霧285)

(9) 男君だち、十なるは、(略)いとらうくじう、物の心やうやう知り給へり。(楨柱201)

(10) それにつけては、いとど加ふる志の程を、御みづからのうへなれば、おほし知らずやあらむ。物の心も深く知り給ふめれば、さりともとなむ思ふ。(若菜下50)

(11) 昔より今に、めやすからず、露ばかり心にくき思ひやりなくのみ

ある、身の有さまかな。もの心を思ひしりしより、『何事もなくてか人におとらん、いかでいみじうおもりかに、はづかしく、人にすぐれても、たゞなる世にすごいてばや』とのみ思ひおごりし物を(夜の寝覚282)

(12) すべて道もさりあへず、物の心知りげもなきあやしの童へまで、ひき避きて行き過ぐるを、車を驚きあさみたること限りなし。(更納日記25) 塚原・東阿氏編「更納日記総索引」所収本文のページ)

(13) 姫君ものゝ心知るまで見ないては、かく聞えさするみよしの、山にも、さそひ聞えたまつりてん。(浜松中納言物語・巻四333)
(14) いかでちからたへば、まいりてつかうまつらん。ゆくすゑに、この御堂のくさきとなりしがな」とこそ思侍れ。されば、ものゝことろしりたらん人は、のぞみてもまいるべきなり。(大鏡・巻五241)

(15) 後の宮おはしませば、その二間の御簾の内のけはひ、人のしげさなど、少々の舞姫など、少しものゝ心知りたらん人は、やがて倒れぬべう恥しうて、面赤むらむかしと見えたり。(栄花物語・巻三115)

(16) 今少し、ものゝ心知り給までは。見たてまつらざるぬるよ。(狭衣物語・巻三337)

以下は省略する。次に「事の心」を掲ぐ。

(17) 斯くて事の心(源氏ト玉鬘トノ関係) 知る人はすくなうて、疎きも親しきも、むげの親さまに思ひ聞えたるを(胡蝶2)

(18) ひたぶるに空事といひ果てむも、事の心(事実) たがひてなむありける。(虫60)

百年内の節会どもの面白く興あるを、昔の上手どものとりぐに書けるに、延喜の御手づから事の心(ソノ絵ノ意味ヲ)かかせ給へるに(絵合196)

②〇講師の、いと尊く事の心(供養ノ趣旨ヲ)申して(鈴虫196)

ところで、受け詞について、ここに注目すべきは、「物の心」の方には、「得」の来る例が九例あるのに、「事の心」の方には、全く見られないことである。且、前者の九例は、何れも紫式部の作品に認められるのであって、あるいは、文体上の一傾向を示す現象なのかも知れない。しかし、同作品の「事の心」には、かかる例が全く認められないのであるから、やはり、「物の心」と「事の心」との性格の相違が「得」の使用不使用に反映していると推測するのが、妥当ではなからうか。次に例を掲げる。

①学問などして、すこし物の心も得侍らば、その恨みはおのづから

解け侍りなむ(少女301)

②物の心得ず荒々しき田舎人どもの(蜻蛉193)

③よき人は、物の心得給ふ方のいと殊に物し給りければ(橋姫16)

④この、かすにもあらずおとしめ給ふ山里の人こそは、身の程にはや打過ぎ、物の心など得つべけれど、人より異なるべきものなれば(朝顔290)

以下の例文を省略する。

さて以上の諸例にも見る如く、「物の心」は、個々の具体的な事柄の有体ではなくて、理性・感性の根源とも言ふべき、本体的なものである。いわば「物の心」を得て、真に「事の心」も理解し得るはずのものであろう。故に「物の心ヲ知る」とは、形而上の機能であり、「事の心ヲ知る」は、形而下に繋りつゝ、形而上を志向

する機能である。そうして、かかる根源的ともいふべき「物の心」は、「知る」と共に、人間性に深く根ざすものとして、おのずから体得せらるべきものであろうか。ここに、「物の心」が「得」で受けられる契機が存するのではあるまいか。なお、「知る」という用語とも密接に関連する問題であるが、これについては、小稿では触れない。

以上の推論の妥当性を傍証するものとして、次の二例を検討してみたい。

⑤あまりこはごはしうけどほげなる宿徳の僧都僧正の際は、世にいとまなくきすぐにて、物の心を問ひあらはさむも事々しく覚え給ふ(橋姫15)

⑥「さるは、かの知り給ふべき人をなむ思ひまがふ事侍りて、不意に尋ね取りて侍るを、その折は、さるひがわざとも明かし侍らずありしかば、強ちに事の心を探ねかへさふ事も侍らで(行幸133)

右の二例では、それ／＼質問の意の下接語を伴っている。しかし、⑤は、仏教の深奥な義理を僧に問い明かそうとするのであり、⑥は、玉鬘の生い立ちの真相を探ねようとするのである。ここにも、「物の心」と「事の心」との相違をうかがう事が出来るであろう。

(注) 池田龜鑑博士の校本による。

おわりに

最後に、小稿に取扱った四つの連語の用法を、総合的に眺めてみよう。

「物の聞え」と「物の心」とは、共に形而上的な意味に用いられていることを知る。この意味での類似の連語としては、外に、「物

のざとし」「物の報い」なども挙げることが出来るであろう。すべての「物の十名詞」なる連語群の中での、この種連語の占める位置については、今後の課題として残る。

又、「事の聞え」「事の心」は、共に現実的、具象的な意味に用いられていることを知る。この意味は、すべての「事の十名詞」なる連語に、基本的に認められるようである。

一体、かかる、「物の十名詞」連語と「事の十名詞」連語との用法の異りは、根本的には、「物」と「事」との相違に基づくと考えられる。この両語の性格の相違に関しては、周知の如く、諸先学の論ぜられたところであり、このことには触れないでおく。

付記 「物の聞え」と「事の聞え」とについては、第八回国語教育学会(42・8・12)で発表させていたがいた。小稿は、その節いたがいた清水文雄先生の御示教によって、補訂し得たものである。心から御礼申し上げる。(42・8・31)